

【学位論文審査の要旨】

氏名 前田 悟志
学位の種類 博士（社会学）
課程・論文の別 論文博士
学位論文名

消費社会におけるエスニック・ヒエラルキー
——画一化＝多様化相克論再考

論文審査委員	主査	首都大学東京教授	玉野和志
	委員	首都大学東京教授	中尾啓子
	委員	首都大学東京教授	丹野清人

論文内容の要旨

1. 論文の目的

本論文は、グローバル社会において文化は画一化しているのか、それとも多様化しているのかという画一化＝多様化相克論にたいして、エスニック・ヒエラルキーという観点から考察を行ったものである。

そのために、人種という生物的差異にもとづく制度的差別の撤廃、経済的・職業機会的な差別や格差の克服をへてもなお残る新しい人種差別としての待避的差別＝第三のカラーラインに関する議論から始め、それらを文化的な差異としてのハビトゥスにもとづく差別ととらえることで、社会学の議論と結びつけると同時に、消費社会化の進展によってそれらが変化していく可能性について、ロサンジェルス郡における韓国系在住者にたいして韓流ブームがもたらした影響という観点から実証的にアプローチしている。

本論文は、その基本的な着想をネグリ・ハートの＜帝国＞論から得ており、そこで展開された多様性が礼賛され、創造性に駆動されつつも、欧米を中心とした文化的秩序が＜モダン＞や＜普遍性＞という概念を通して＜帝国＞のヒエラルキーを構成し、古典的な人種差別から新しい人種差別への移行が起こっているという主張を、いくらかは実証的なたちで確かめてみようという意図をもっている。そのためネグリ・ハートがエンターテインメントの首都と位置づけたロサンジェルスフィールドに消費社会の影響を推し量ろうとしているのである。

2. 論文の構成

論文の構成については、以下にその目次を示しておく。

序 章

- 1 問題の所在
- 2 本論文の課題
- 3 方法
- 4 本論文の構成

第一章 第三のカラー・ラインと「日本人」 カテゴリー

——＜帝国＞の振る舞いコードの共有度合いによるヒエラルキー

- 1 本章の課題
- 2 第三のカラー・ラインと「日本人」
- 3 小括

第二章 文化ビジネスとグローバル消費社会の力学

- 1 先行研究の検討に代えて
- 2 ジグムント・バウマン
- 3 一層の消費社会化とエスニック・ヒエラルキー
- 4 リキッド・モダンな時代のプチブル
- 5 小括

第三章 ＜帝国＞の首都における東アジアと

東アジア系を取り巻くダイナミクス

- 1 本章の問いと仮説，およびキーワード
- 2 状況の変化：韓流の先行研究から
- 3 状況の変化：局地的な人口比率の増加
- 4 音楽と人種
- 5 状況の変化・無変化：コスメティクス
- 6 米国におけるアジア系の歴史概観
- 7 待避的人種差別とハビトゥス
- 8 トランスナショナル・メディアとアジア系米国人
- 9 小括

第四章

- 1 Los Angeles 郡での調査
- 2 データセットの概観
- 3 分析
- 4 仮説検証その 1：クロンバックの α による一致度の分析

5 接触量

6 政治的に正しい回答傾向

7 仮説検証その2: Foreign-born Korean 視点をめぐって

8 小括

終章

3. 論文の内容

以下、各章の内容を紹介する。

序章では、まずグローバル社会において文化は多様化しているのか、画一化しているのかという本論文の課題が提示される。そのうえでネグリ・ハートの＜帝国＞論にもとづき、多様化しつつも、全体としての枠組の画一性は維持されているという仮説が提示される。これをできるかぎり実証的に検証するための方法論が述べられ、本論文の構成が示される。

第一章では、第一のカラーラインとしての人種にもとづく差別や第二のカラーラインとしての経済的格差や職業機会にもとづく差別が克服されてもなお残る第三のカラーラインとしての待避的差別をめぐる既存研究が紹介された上で、日本人がこのような新しい人種差別の対象となりうるかが検討される。検討の結果、従来そのように位置づける研究はほとんどなかったが、それは実際には待避的差別の事例と思われることが、日本人の不適応として認識されてきたからであって、実は日本人も国際的に待避的差別の対象であったことが主張される。そのうえで、近年中国の台頭によって、日本人が中国人よりも西欧に文化的に近い存在として扱われるようになったことが指摘され、一部では確かに多様な認識が生まれつつあるが、全体としての序列には変化がないことが示唆されている。

第二章では、待避的差別の基準となっているのは、人種でも単純な意味での経済力でもなく、何らかのふるまいや消費生活上の様式であることから、社会学における消費生活様式に関する既存研究が検討される。具体的にはソースタイン・ヴェブレンの「誇示的消費」やピエール・ブルデューの「ハビトゥス」にもとづく区別（＝『ディスタンクシオン』）などの議論である。また、近年の消費社会化にともなう文化変容の議論として、ジグムント・バウマンのリキッド・モダニティの議論が検討され、バウマンのブルデュー批判にもかかわらず、文化的な差異が待避的な差別の根拠となるだけの意味をもって存続していることや、そこから多様性を管理する技術が生まれていることが指摘される。

以上の理論的な検討をふまえて、第三章と第四章ではネグリ・ハートの＜帝国＞論から得た着想を、できるかぎり実証的な検討によって裏づける試みがなされていく。

まず、第三章では消費社会化にともなう文化変容によって、文化的な意味での画一的な全体的枠組に、バウマンが主張するようリキッド化＝液状化の動きが見られるのか、それともブルデューの議論がまだ有効であるかが、実証的に検討される。検討のフィールドとしては、ネグリ・ハートによって＜帝国＞の文化的な意味でのエンターテインメントの首

都とみなされたロサンジェルスにおいて、近年その地位向上を果たした韓流のドラマや K-pop, コスメティックスの存在感が、ロサンジェルス郡に居住する韓国系アメリカ人および韓国からの移民の間にどのような影響を与えているかが、検討される。具体的な検討は、この地域に存在する韓国系を含めた東アジア系のコミュニティに生まれ育った若年層を中心に行ったインタビュー調査が利用されている。必ずしも量的な検証に耐えうるものではないが、50 名以上の対象者にインタビューを行い、収集された発言内容を相互に照らし合わせる綿密な作業が行われている。

その結果、以下のような知見が得られている。かつて韓国本国での文化的様式を残して、十分にアメリカナイズされていないスタイルを FOB (Fresh Off the Boat) と称して、一種さげすみの意味で使われていたのが、Asian Pride ムーブメントの刷新を介して (アメリカ西海岸ではこれが AZN と呼ばれる)、FOB がむしろ流行のスタイルとしてもはやされるようになる。このような変容に韓流が世界的な評価を得たことが影響していることは十分に推測されることで、それまでは韓国系アメリカ人が拒否していた韓国流の習慣 (年齢に応じて呼び方を変える習慣など) を韓国系の二世、三世が受け入れ、それまで険悪であった韓国移民と韓国系アメリカ人との間の障壁が、急激に薄れていくという現象が起こっていた。現在では韓国系アメリカ人も含めて、韓流のファッションやスタイルが広く受け入れられ、アメリカナイズされることがよいとする風潮は以前に比べて弱くなっている。しかしながら、このような変化はあくまで韓国系や東アジア系・東南アジア系の移民たちの間での変化であって、白人たちの間にまで広がっているわけではないという点では、韓国系のインフォーマントの意見は一致している。また、そのような傾向を認めつつも、やはり韓流を受け入れていない韓国系アメリカ人も存在している。つまり、韓流エンターテインメントの世界的成功は、アジア系移民の間での韓国流のスタイルへの評価は変えたとしても、それが支配的なアメリカ文化の中にまで入り込んだとは評価されていないのである。

続く第 4 章では、ロサンジェルス郡のいくつかの公道上で通行人に声をかけ、ネット上に置いた調査票に回答をしてもらうように依頼するという方法で収集した 300 件余りのデータを用いて分析が行われている。調査内容はアメリカ生まれの黒人、白人、ヒスパニック、コリアン、中国台湾、日系、フィリピン系、外国生まれの白人、ヒスパニック、コリアン、中国台湾、日系、フィリピン系というカテゴリーごとで、審美的な意味での望ましさ、恋愛対象としての魅力、親しい友人としての気安さの 3 つについての距離感を確認したもので、集計・分析の結果、次のような知見が得られた。ひとつは調査時点での知見なので、その時系列な変化については不明であるが、アメリカ生まれの韓国系と韓国生まれの韓国系との間の距離は他のカテゴリーと同じように近いことが確認された。他のエスニックな区分と同様に、特にアメリカ生まれと韓国生まれで隔絶感はないことがわかった。また、この調査では一般的に「モダン」と考えられているエスニックな序列についても確認しているが、回答者のエスニックな違いにかかわらず、ほぼ同様な序列が認められていることが確認された (アメリカ生まれの白人、黒人、コリアン、日系、外国生まれの白人、

アメリカ生まれのヒスパニック、中国台湾、フィリピン系、外国生まれのコリアン、日系、ヒスパニック、中国台湾、フィリピン系という序列である)。つまり、アメリカ生まれか否か、どのようなエスニックに属するかによって多様な選好が見られるにもかかわらず、＜モダン＞とか＜普遍性＞という点では、驚くほど一致した序列が共有されているのである。

以上の検討から、終章では改めてグローバル社会における文化の多様性と画一性に関する考察が行われている。ネグリ・ハートが提示した＜帝国＞のモデルは、それ自体実証的な議論ではないが、新しい人種差別としての待避的差別をめぐる議論やブルデューのハビトゥスをめぐる議論なども参照しながら、韓流のドラマ、K-pop、コスメティックスなどの国際市場における文化的な位置の上昇が、ロサンジェルス郡におけるアジア系コミュニティの若者たちにどのような影響を与えたかという限定的な意味での実証的な検討にもとづき、韓流の文化的なプレゼンスの上昇は、確かに韓国系アメリカ人において本国の文化を見直す動きを生みだし（FOBのAZNを介した意味の変化）、韓国人移民との関係を改善する意味では効果をもったが、韓流がアメリカの支配的な文化において認められたとは必ずしもいえず、＜モダン＞や＜普遍＞という意味での文化的な序列については、大枠としての秩序が維持されていることがわかった。この意味でネグリ・ハートの意味での＜帝国＞の文化的秩序にはそれなりの説得力があり、グローバル社会においてバウマンがいうほどのリキッド化は起こっておらず、ハビトゥスにもとづく大枠としての画一化の中で、多様性が管理されている実態が明らかになったと結論づけられている。

論文審査結果の要旨

1. 論文の評価

本論文は、ネグリ・ハートの＜帝国＞論に着想を得ながら、新しい人種差別としての待避的差別の議論に、ブルデューのハビトゥスにもとづく卓越化の議論を接続するかたちでひとつの実証的な検討の場を設定し、限定されたものとはいえ、ロサンジェルス郡のアジア系コミュニティの若者たちへの聞き取り調査とウェブ上での集票調査の結果から、韓流ブームがもたらした文化的な影響の範囲について考察したものである。実証的な方法という点では限界の多いものではあるが、審美的な望ましさや恋愛対象としての魅力、友人としての気安さという第三のカラーラインにおける待避的な差別の問題を果敢に取り上げた点では、きわめて現代的な意義の高い研究である。しかもそのような意味での多様性にもっとも寛容であるといわれるロサンジェルスにおいても、大枠としての全体的な文化的序列は確固として維持されている点を明らかにした点は大変興味深い。それはグローバル社会における多様性の管理という新たな課題領域を明示した点でも、意義の大きいものである。ただし、文章表現という点では若干の難があり、とりわけ理論的な論述において、も

っとシンプルな叙述に努めるべき点が、口頭試問において指摘された。

2. 審査結果

以上、本論文はグローバル社会における多様性と画一化の関係について、その多層的で複雑な様相にたいして、限定された形とはいえ、実証的な検討を試みたものであり、博士論文として十分な内実をそなえた研究であると評価できる。口頭試問および公開審査会での質疑応答をふまえ、審査委員一同は一致して前田悟志に博士（社会学）の学位を授与することが適当と判断した。